

紫愛歌【二・色のうた】

Love Song : MIYUKI

「はあ……」

暖かい春の日差しに照らされたベンチに座る女の子から、ため息が漏れ出た。

「どうしたの？ 溜め息なんかついて。折角の美人さんが台無しよ？」

後ろから、心配そうに、それでいて面白がるような声——この場合は面白がる、が九割九分を占めている——が聞こえた。人が悩んでいるときに面白がつて声をかけてくる失礼なやつは誰だ、と私——藤井深幸はむっとしながら後ろを振り返る。が、すぐにその気持ちは驚きに変わった。

「お姉ちゃん」

声の主は、私の家の向かいでカフェを営んでいる夏目佳子さんだった。『佳子』と書いて『よしこ』と読む。本人はその名前で呼ばれるのをとんでもなく嫌がって、『ナツさん』とか『ねえさん』とか呼ばせている。

そう、呼ばせているのだ。にっこりと笑って、「その名で呼ぶなって言っているでしょ？」と頭をげんこつでグリグリされるのは、とんでもなく怖い。そして痛い。彼女の顔が、一般的な顔立ちであれば怒り笑顔にも普通の恐怖を感じる程度で済んだらう。だが、彼女は美しいのである。道行く人が振り向くくらいには美しいのである。美人が怒ると怖いというのは本当らしい。

そんな夏目さんは、当然私の実の姉ではない。幼い頃から知っているのでお姉ちゃん呼びなのだ。『よしこさん』と呼んだのは、ただの出来心である。その時にグリグリを食らっ

て以降は、何があってもその呼び方は使わないようにしている。

「——深幸ちゃん？ 聞いている？」

「え？ あ、はい！ いいえ！」

「はいか、いいえ。どっちか分からないわ……。予想はつくけど」

夏目さんは、苦笑しながら私の隣に座った。

「うう……ごめんさい」

いけない、いけない。回想に集中していて全く話を聞いていなかった。

私はしょんぼりしながら夏目さん——ここからはお姉ちゃんと呼んでもらう——の方を見る。怒ってはいないみたいだけど、人の話はちゃんと聞かないといけないと、小学生の頃から言われてきた。え？ 普通はもっと幼い頃から言われないかって？ それはまあそれぞれの家庭の違いってやつだ。

「それで、何の話をしていたんだっけ？」

「何悩んでるの、って話よ。私が話しかけたとき暗かったから」

ああそうだ。私が溜め息を吐いていたからだろう。相変わらず鋭い。そういうところに気づくお姉ちゃんはすごいなと思うし、羨ましい。けれど、今回はその悩みが悩みなだけに相談しづらい。まさか初めて会った人と目を合わせたら、気持ちが悪くなりましたとは言えない。人間性を疑われてしまう。いや、お姉ちゃんはそのようなことしないでくれるだろうけれど、それでも嫌だ。というか、この人だと恋愛に繋げそうで怖い。

「なんでもないよ。あー、その……そう！ テストのことで

ね。順位が低くなっちゃったから、お母さんが怒っちゃって」「あら、でもおばさんはこの間あなたの成績を自慢していたわよ。実力テスト、学年二位だった」

恐るべし近所の情報網。敵は家族にいた。ちなみに、皆さん気付いていると思うが、『おばさん』とは私の母のことだ。

「で、本当の理由は何なの？ もしかして、私には言えないこと？ はっ。まさか、恋人ができたの？ ……そっか！ どうとう深幸ちゃんにも春が来たのね！ お姉さん嬉しいわ。で、お相手は？ 私の知ってる人？ 知らない人？ 性格は？」

来ちゃったよ。お姉ちゃんの恋愛話モードが。

私は頭を抱えたくなりながら、お姉ちゃんに返す。

「いや、恋愛じゃないよ。私の脳が変なんじゃないかって考えていただけだから」

よくよく考えてみるとこれはこれで変な話なのだが、まあ恋愛ではないし間違ったことは言っていない。

「あら、じゃあ、何なの？ お姉さんに話してみよ。何か力になれるかも」

すぐくそうしたい。お姉ちゃんに頼りになる。今までも勉強のことや周りの人間のことで、例の夢の話をしたら、ちゃんと考えてくれた。だが、あれを話したら確実にお姉ちゃんは恋愛に繋げるだろう。それは一目惚れよとか言っ

「ほら、話してごらんって」

お姉ちゃんが迫ってくる。ああ、逃げられない。

「実は……」

「それは、一目惚れよ」

うん、だよ。そう来ると思った。

「いや、でも、それだったら、不快だって感じるかな」

そんな風に返したら、お姉ちゃんほうん、と首をひねった。

「その、不快感ってどんな感じなの？ 卵の殻が上手く剥けない時みたいな感じ？ それとも、肌を糸にくすぐられる時みたいな感じ？」

その具体的な例えは一体どこから来るのか。ああ、彼女の実体験からか。

「何とも言えない不快感？ ぐるぐるした感じ？」

「それは恋つてものを知らないから、と言いたいところだけど、その感じはよく分からないわね」

お姉ちゃんは恋愛の酸いも甘いも(自分のことではないが)経験してきた人だ。惚れっぽいとかはないのだが、よく相談を受けるらしい。そんな人が分からないと言うのだから、これは恋愛事ではないのだろう。

私は、心の中になんとなく安堵のようなものが生まれるのを感じた。

「つまり、これは恋愛事じゃないのかもね。じゃあ、一体何なのかしら」

「それを聞きたいのはこっちだよ、お姉ちゃん」

そう言うと、お姉ちゃんはそうよねー、と息を吐いた。

「でも、これは分かんないかも。考えてみるわね。深幸ちゃんも何か分かったら言って」

ごめん、もう仕事に戻らないと、とお姉ちゃんは済まなさそうに去って行った。あの人は、考えると言ったたら本気で考

える。とても優しい人だ。

「ありがとう、お姉ちゃん」

さて、一人になったところで考えを再開しよう。お姉ちゃんがいたから考えられなかったということではないが、一人でまとめてみるのも良い気がする。

そうして、三十分程考え込んでいた時だった。

「大丈夫ですか？」

目の前で声が聞こえて、咄嗟に顔を上げた。そこには、一人の男が立っていた。

と言うと何だか事件の香りがしてきそうだが、ただ本当に男が立っていたのだ。

男は心配そうにこちらをのぞき込んでいた。そう言えば、彼はさつき何と言ったつけ。確か大丈夫かと言っていたよ。うな気がするが。

私が訝しそうな顔をしているのに気付いたららしい彼はほつと息を吐いて言った。

「ああ、体調が悪いわけではなかったんですね。……いえ、さつきからずっとそこで動く様子が無かったので、気分が優れないのかと思って」

ああ、なるほど。心配してくれていたのか。

「ありがとう。でも大丈夫ですよ。ちよつと考え事してただけなので」

そういうと、彼はまた、よかつたと息を吐いた。初めて会った人にこんなに親切にできるってすごい子だなあ。私この間から感心な子によく合うな。

そこまで考えたところで、あ、と思った。今考えていたのはその親切にできる子のことだよ。

思い出した途端、私は目の前の男のことも、ここが外だと

いうことも忘れ去ってしまった。彼はそんな私を見てどう思っただろうか。その答えは一時間後くらいに出た。

Elegy : SINONOME

僕は目の前で頭を抱える人間を見た。最初は、ベンチに座って微動だにしないから、気分が悪いのかと思って声をかけた。その人は、一度は顔を上げてありがとうと言ったが、数秒後、今度はハツとして頭を抱えだした。大丈夫かな、この人。周りにはいないタイプだが、一緒にいるのを見られるのも嫌だ。声をかけるんじゃないやなかつたと今更ながら後悔した。とりあえず、声をかけようと思い、あの一、とかすみませーんとか言ってみた。何度目か、もう帰ろうかと思いはじめたところをやつとこちらに気が付いた。その途端、またおろおろとした。反応が見えていて飽きないな。と言うか、何故、今おろおろしているのだろうか。

「どうかしました？」

そう訊くと、その人は肩をびくつと震わせた。ウサギみたいで、いじるのが面白い。

「えと、ごめんなさい。変でしたよね。ダメだとは思っているんだけど、ついなつちやうんです、周りが見えなくなってしまうの」

あはは、と彼女はへらへら笑った。

そう言えば彼女は どうしてベンチで座って動かなかつたのか。今も、何度も声をかけないと気づかないくらい考え込んでいる様子だった。

「あなたは今、何かに悩んでいる。しかもかなり深刻な」

「え？ あ、うん……えつ、何で？」

「やっぱりそうだったか。まあ、考えるまでもないくらい分
かりやすかったのだが。」

「いえいえ、体調が悪いわけでもないようなのに、言動が少
し……ああ……面白かったのだ」

「つまり、おかしかったって言いたいんですね。それは多分
元からですけど、まあ、結果的に合っているからいい、かな？」

「ああ、やっぱり元からおかしいのか……」

「はい？ 何か言いました？」

「いえいえ。その話を聞かせていただきたい……というところ
ですが、特に親しくもない人に話し辛いでしようし、話す
気も起きないでしようから大丈夫です」

「言ってから、なんて上から目線と思っただけ、言ってしまった
のだから仕方ない。彼女は気にしていないようなので、良
しとしよう。」

「そうですね。私もあまり整理されていないので話せること
がないんですよ。ああ、そうだ。名前」

「え？ 名前が何ですか？」

「唐突に名前、と言うから面食らった。一拍置いて、名前を
教えてくれと言われているのだと気づいた。」

「僕の名前は……」

「私の名前は藤井深幸です。ふじいは、花の藤に井戸の井。
みゆきは、深い幸せて書くの」

「名乗ろうとしたら重なるように彼女が名乗った。彼女はに
こりと笑って、「聞いた方が先に名乗るのが礼儀でしょう？」
と言った。」

「あなたの名前は？」

「僕の名前は、東雲しのめ。東雲やな弥な茄なです。しのめは東の雲。や
なは卑弥呼の弥に茄子の茄です。えっと、良い名前、ですね」

「ありがたい。あなたのは……あまり男性では聞かない名前
ね。でも格好いいと思う」

「ありがとうございます」

「大体の人はキラキラネームかな、とか思っている顔をする
のだが、彼女は違っていた。本当に格好いいと思っただけ
うだった。周りの人間にはいないタイプだと言ったが訂正す
る。初めて会ったタイプだ。この名前も意外と役に立つも
んだった。」

「東雲くんは今いくつ？」

「今は十五です。今年で十六」

「あ、一個年下だ。私、今十六で今年十七」

「成程、年上なのか。変な言動から同い年か年下だと思
いでいた。」

「年下なのか。大人びてたから、てっきり年上なんだと思
ってたよ。いやー、世界は残酷だね」

「彼女も似たようなことを思っていた。なんとなく嬉しくな
った。」

「……それでもいい？」

「え？ ああ、すみません。ポーっとしていて聞き逃してし
まいました」

「えーとね、苗字にさん付けてってなんだか堅苦しいから、名
前で呼んでもいいかなって言ったの」

「勿論私のことも名前前で呼んでいいよ、と彼女は笑った。顔
が熱くなる。気温が高くなってきたな。」

「大丈夫ですよ。では、僕は深幸さん、と呼びますね。」

「そう言うと彼女はうん、と大きく頷いた。そして、感動し
たような顔をした。」

「あー、何か苗字で呼ばれると、大人っぽく聞こえて良いね」

そんなことに感動するのか。ツボが普通の人間とは違っていて面白い。興味が湧いた。観察するのもいいかもしれない。そんなことを思っていると、彼女がポケットを探りだした。今度は何だろうか。

「今度はどうしましたか？」

「家の鍵がない」

彼女は慌てて周りも見渡した。軽くパニックになっているらしく、先ほどまでのおっとりとした感じや、丁寧さがない。成程。慌てるとそうなるのか。

「僕も探しますよ。どんな感じの鍵ですか？何かストラップが付いていたりとかしますか？」

「え、悪いよ。でも、ありがとうございます。えっと、雪の結晶のストラップが付いているの」

「分かりました」

そして、二人で探すこと二十分。鍵は、ベンチの脚の隙間に挟まっていた。どうやったらそんなところに挟まるのか。

「ありがとうございます！ほんつとうにありがとうございます！」

鍵が手元に返ってきた彼女は、涙ぐみながら僕にお礼を言ってきた。なんともオーバーな反応だと思うが、出会って話した数時間の間で、これが素なのだと分かるようになった。この天然記念物並みに珍しいな。いじりたい。

「それじゃ、僕はこれで」

まだ見ていたいと思っただが、特に話すことも無くなったので——というか、最初は体調が悪いのだと思って声をかけただけで、ここまで話し込むのがおかしいのだ——帰ろうと彼女に背を向けた。その時。

「あ、待って」

彼女が慌てたように言った。立ち止って彼女の方を見ると、

同じく僕の方を見ていた彼女と目が合った。その時、僕は、今まで彼女と目を合わせずに喋っていたことが分かった。アーモンド形の目は、今こちらを見て大きく見開かれている。僕の顔に何か付いていただろうか。

綺麗な目だと思っただので、もつと見ていたかったが、それは叶わなかった。彼女が顔を俯けたからだ。そう言えば、彼女は喋っている間中、ずつと顔を俯けていた。癖なのだろう。「えっと、お礼。今手持ちがこれしかなくて。今日は心配してくれたり、鍵探してくれてありがとうございます」

そう言っただけ顔を俯けたまま、彼女は僕に飴をくれた。飴を持ち歩いているとか、おばあちゃんかと思ったりもしたが、口には出さなかった。ありがとうございます、と言っただけ。こそ、ぼうつとする彼女の前から立ち去った。

角を曲がる前に彼女の方を見ると、まだ呆けていた。彼女の周りを見てみると、僕と同じように、いや、もつと露骨に彼女の方を見ている男がいた。気の弱そうな奴で、ストーカーとは少し違った雰囲気であった。何というか、声をかけたのが、勇気が出ないという感じに見える。

僕は心の奥の方に不快感を感じた。あの男が彼女の方を見ているのが嫌だと感じているようだ。彼女と話すのが、彼女の笑顔を見られるのが——。

ハッとして僕は何もせず、角を曲がって家に帰った。自分が感じたものの正体に気付き戸惑ったから、と言うのが多分主な理由だろう。そして、彼女を見つめていた奴の感情にも、同じものが見受けられて、焦って立ち去ってしまった、というのもある。

チツと舌打ちする。母親が、おかえりと声をかけてくるのに適当に返し二階へ上がる。

率直に言うとは驚いている。そして苛立ってもいる。自分が恋をする事になるなど思ってもいなかった。そして、感情に気付いたと同時に、敵まで見つけてしまった。とても面倒臭い。が。

「邪魔なのは消えてもらえばいいのか」

口元が緩む。どうやって彼女に近づこうか。そして、どうやってあいつを排除しよう。面倒臭いが、彼女を手に入れるためには仕方がない。

「まずは、学校を調べよう。それと……家も」

これじゃまるで僕がストーカーだ。そういう気質があったのかな。まあ、いいや。

僕は、軽くスキップしながら自室に入っていった。

Love Song : NAO

また失敗した。今日も彼女——藤井先輩に声をかけられなかった。あの夢のこととか、話したかったのに。それに、今日は、美人な女の人と話した後に、アイツと喋っていた。学年トップの成績を誇るアイツ——東雲と。アイツは、高校生らしくない、とても大人びた雰囲気とその頭の良さで、入学してすぐに有名人だ。周りにはいつも人がいる。先輩はアイツのことを知らないようだったが、あいつは上の学年の人にも人気がある。

どうして、今俺が『アイツ』と言っているのかと言うと、少し長くなるのだが、入学式の日、俺はアイツとぶつかった。俺もアイツも倒れはしなかったが、軽くよろけた。

俺は咄嗟に謝ろうとした。すると、アイツは、「チッ。ぶつかってんじやねえよクズが」

と言って立ち去ったのだ。それを、その日から少ししてできた話せるクラスメートに言ったら、そんなことあいつがするわけがないだろうと笑われた。アイツは入学式の直後から皆に取り入っていたらしい。それから俺は何度かアイツとすれ違ったが、俺のことは記憶にないらしく、反応は全くなかった。

何故俺にだけあんな態度をとったのかは気になるが、とりあえず腹が立つ。それが、俺が東雲を『アイツ』と言っている理由だった。

そんなことかと思うかもしれないが、体験してみたら分かる。『アイツ』と呼んでしまうのだ。

話を戻そう。アイツが何故彼女と話していたのか。しかも仲良さそうな感じで。お似合いな感じであつた。俺も話したいのに。アイツ怖いし……いやいや違う。怖くない。はっ、もしかしてアイツも彼女を狙っているのか？ それはヤバい。俺勝ち目ない。彼女と話すことすら出来ていないのに。見つめることしか出来ていなくて、彼女の家を知るぐらいしか出来ていないのに。

そこまで考えてはたと気付く。これじゃ、まるでストーリーみたくじゃないか。違うんだ。俺は別に彼女のことを全部知りたいとかそんなことは……あるけれども。それは好きになつてしまったが故の、そう、仕方がないことなのだからいいだろう別になつて……って俺、誰に対して喋っているんだろう。

アイツは危険だから、彼女に近づけないようにしたい。だけど、何をやっても不自然な気がするし。どうすればいいんだろう……。そう言えば、彼女といつも一緒にいる、入学式の日、木から降ろしてくれた人は誰だっけ。えっと、確か……

。あ、そうだ牧野先輩だ。あの人はいい人そうだったし、先輩の近くに居るから、相談したり話を聞いたり出来そうだな。よし、彼を探そう。

Love Song: LENN

ところで、尚が今いるところは、先程深幸と弥茄が喋っていたところである。つまり、彼は人通りの中に突っ立っている迷惑な人間と見られているわけである。そして、彼は集中しすぎると考えが口から漏れ出てしまったりする。つまり独り言だ。往来の中でぶつぶつと何か呟く男が一人。容姿からまだ学生だと分かるが、それでも――

「犯罪みたいだぞ」
俺はそうと近寄り、彼の背後で呟いた。その途端、その背中がビクッと揺れた。恐る恐る振り返った彼の瞳が大きく見開かれた。

「牧野先輩」
想像以上に吃驚した顔をするから面食らう。俺、彼に何かしたっけ？ 入学式の日には木から降りられなくなったのを助けただけだと思っただけだ。

「鷹見尚くんだよな？」
「はい、そうです。って、名前覚えて下さったんですか？」
感激したように言ってくる尚は子犬みたいだ。

「ああ。別に名前覚えるくらい簡単だろう。まあ、深幸――入学式の日には俺と一緒にいたやつな――は得意じゃねえんだけど。あ、もしかしてお前もそのタイプ？ 一年経っても

まだ先生の名前が覚えられないとかあったりした？」

「いえ、そう言うわけじゃないんですけど。僕みたいな地味なやつを覚えて下さるなんて、と」

すぐくネガティブな子だ。最初に会った時もその片鱗は感じられたけど、本当にネガティブだ。深幸のやつもひどいけど、それと肩を張れるんじゃないかな。

「僕みたいなって自分を卑下するなよ」
励ましてみるが、これあんまり効かないんだろうな。深幸にも効かないし。

そう思って尚を見ると、また感激したような目でこちらを見ていた。やめる。そんな目で俺を見るな。

「どうかした？」

「やっぱり先輩はいい人だなあ、と思って。俺、すごく尊敬します。師匠になって下さい」

「あ、ありがとう。だけど師匠の件はちょっと難しいかな」
そう言うと尚は悲しそうな目をしてこちらを見てくる。だから、そんな目で俺を見ないでくれて言っているだろう。

「てか、何でこんな往来で突っ立ってたの？ 周りからすぐく見られてたけど。と言うか今も見られてるけど」

尚は顔を真っ青にした。ころころ表情が変わるところも深幸とそっくりだが、あいつはもつと手が動く。その点は大人しくて可愛げがあるな。そんなことはどうでもいいが、そろそろ可哀相だな。ずっと真っ青なままだ。

「場所を変えようか。目立つし」
尚は、ホッと息を吐きながらはいと答えた。

「はあ、深幸をねえ。物好きなやつがいたもんだ」
俺達は、近くの喫茶店に場所を移した。ここは知り合いが

経営している割合美味しい店だ。人も、この時間ならそんなに多くないから話し合いにはうってつけだ。

「いや、でも、藤井先輩は俺の学年では人気ありますよ」

「俺の学年じゃあいつは『残念な美人』『黙っていたら高嶺の花』って言われてるよ」

「えっ」ともそんな風には見えないんですが」

ああ、そうだろう。まだお前にはその面を見せていないからな。これから知っていくと思うけど。

「あいつはかなり残念だよ。まあ、その話は後で話すよ」

「ぜひ、聞きたいです！」

周りに花が見える。こいつは癒し系ポケモ……いや、何でもない。こいつは癒し系か。

そこまで考えた時に、ふと思った。

「ん？ そう言えばそもそも何で深幸を探してたんだ？好きだからって言ってもわざわざ休日まで……まさか、お前、スト……」

「違います！ そうじゃないんです。ただ、確かめたいことがあってそれで。でも話しかけれなくて。そうこうしている内に家とかも知っちゃいましたけど……」

おい、お前、それは完璧にストーカーだぞ。そう思ったが口には出さなかった。俺は後輩思いだからな。

「そうなのか。で、その確かめたい事って何？」

「あ、それは……」

尚は言いにくそうに俯いた。やましいことでもあるのか？

「話してみる。大丈夫。俺はぶっ飛んだ話でも聞くよ」

深幸で慣れているからな。あいつは夢の話もそれ以外もぶっ飛んでいやがるから。幼いころからそれに付き合ってきたんだ。ちよつとやそつとじゃ驚かない自身がある。

「ありがとうございます。じゃあ……」

そして、尚は話してくれた。入学式にあったことを、自分が見る夢の話。

「んー、あー、それはまたややこしい。分からないことが多くなっちゃった」

「すみません。分かりづらい話で」

「いや、分かりやすいよ。そうじゃなくて、俺が言いたかったのは……あー、面倒臭いな。そうだな、簡潔に言うとな、俺はその夢の別視点の話を知っている。多分だが」

「えっ？ そうなんですか？」先輩がもしかして俺に殺された人なんですか？」

傍から聞いていたら、警察を呼びたくなるような言葉だが、俺達は大真面目だ。

「いや、俺はその話とは全く関係ない。俺はその話を他で聞いたことがあるんだ。——深幸がその夢を見るんだ」

尚の瞳が声をかけた時と同じように大きく見開かれた。だが、今回は驚きだけではなく、絶望のような色を混ぜて。

「そ、それは、彼女があつ」

尚がはくはくと口を動かす。顔色は先程とは比べ物にならないほど青かった。いや、青いを通り越して紙のようだった。

「多分だ。完全にそうと決まったわけじゃない」

「でも、赤の他人が同じ場面の夢を見るなんておかしいでしょう！ どうして！」

「一回落ち着け。今騒いだってどうこうなる話じゃねえだろ。さっきも言ったがまだ完全にそうだと確信が持てないんだから。ここで決めつけたら何も分からなくなる」

なんとか尚は落ち着いた。それでもまだ目がうるうるとし

ていて、動揺はしているらしい。それはそうだ。今話を聞いた俺だってそうだったのだから。

しかし、ややこしいことになった。あいつの前世説も馬鹿には出来なくなってきたかもしれない。

俺は掴めそうで掴めないこの話にすこし苛立った。それを見せはしないが、空気が変わったのは感じ取ったのだろう。尚はびくびくとこちらを見た。それに気づいてやっちまったと思った。

「ごめんごめん。怖がらせちゃったか？ 集中するとちよつとな」

そう言う尚は首を横に振って大丈夫ですと答えた。

深幸のことを散々悪く言ったが、俺も大概だ。たまに深く考え事をすると雰囲気が怖すぎるとかで、犬も寄ってこない小さい子には泣かれる。女も男も俺を避ける。気が付いたら周りに深幸しかいなかったなんてこともあった。

「とりあえず、俺は深幸にそれとなく聞いてみる。お前はあいつを見てそうだと気付いたんだろう？ あいつも何か気付いているのかもしれないからな」

十中八九何かしらあったのだろう。あの入学式の日以降のあいつは様子が変だった。それが、尚と関係しているならば。

「ヤバイことになるかもな」

ポツリと呟く。尚には聞こえていなかったらしい。だが、彼もかなり思いつめた顔をしている。俺は尚の頭にポンっと手を置いた。

「心配すんな。ちゃんと調べてやるし、それに、お前は実際人を殺しちゃいないんだろ？ 大丈夫だよ」

にっと笑う。尚もつられたように笑った。

「あ、俺買物頼まれてたんだった。じゃあ」

俺はレシートを掴んで席を立った。

「あ、ここは俺が払います。相談に乗ってもらったんだし」

「いやいや、ここは年上が払うもんだよ」

あと、この店長は俺に当たりがきついな。俺が払わなかったら……ああ、考えるだけでも恐ろしい。

そつと店長の方を見ると、彼女は、そうだお前が払うんだと言うような視線をこちらへ向けていた。ここは、こそこそ話にはうってつけだが、俺の財布が寂しくなってしまう。

「ありがとうございます！」

尚がお礼を言いながら頭を勢いよく下げた。

うん、本当に子犬みたいだ。と言うか、この子は本当に男かな？ もしかして男の娘ってやつなのかな。初めて見た。

尚と別れた俺は帰路に着きながら考えていた。

夢が同じと言うのは聞いたことがないな。しかもちゃんと視点まで違ふときたもんだ。仮に深幸の言うとおりの前世の記憶が現れていたとしたら……。

俺はそこで気が付いてしまった。そうなる——深幸に記憶があったとしたら——

「尚は苦戦するな」

そうなのだ。尚は前世で誰か分からないが誰かを殺し、そして、目の前で深幸の前世も死んでいる。となると、深幸の前世は恨みを抱えている可能性が高い。

俺はイライラと爪を噛んだ。

前世に自分たちの感情を左右されているようで気に食わない。こうなりや、意地でもくつつけさせてやる。

「いやいや、そうじゃないだろう」

あくまで彼らの気持ち優先させなくてはいけないのだ。

ただそこに前世の記憶を干渉させてはいけないうるだけだ。

「まだそうと決まったわけじゃないんだ。ちゃんと考えて見極めろ」

まだ決まったわけじゃない。そう、まだ。

俺は言い聞かせるようにしながら家に入った。そこで気が付く。

「尚と連絡先交換するの忘れてた」

まだまだ詰めが甘いな、俺。

Bregy : MIYUKI

猫になりたい。

私は自室で一人考え込んでいた。

猫になりたい。いや、この際ナマケモノとかでもいい。とりあえず、悩まなくてもいいようなモノになりたい。

だって、入学式の日には彼、えっと、鷹見尚くと目が合っ
て変な感じになり、それでどういうことだろうと考えていた
ら次は弥茄くんと同じことが起きた。これは一体どういうこ
とだろう。悩み込むに決まっている。

「あ、でも今回は何か前とは違った感じだったな」

そう、今回は前の尚くんの時とは異なり、不快感ではない
感じがしたのだ。泣き出してしまえばいい感じ。二つともよ
く分からない感じなのは同じだが、根本が違うのだ。説明し
ようにも少ない私の語彙では満足に説明できないのが悔し
い。

悩みは誰かに吐き出したら軽くなると言うが、これは相談
しづらいことこの上ない。零れんには勘付かかっているっぽい、

あいつは変なところで遠慮するから、あいつがそれについて
何か関係しない限り訊いてこないだろう。零が一番相談しや
すいのだが、自分からは話しづらい。また質問攻めにされて、
気のせいだとか言われた時が辛い。前に夢の話を使った時し
かりだ。

「うーあー」

言葉に出来なくて叫ぶと、隣からうるさいという兄の苦情
が来た。いつもうるさいのはお前だというのに、理不尽だ。

兄のことは置いておこう。考えても考えても答えが出ない
のはストレスが溜まる。こういう時は寝よう。あ、でも晩ご
飯もまだだしお風呂もまだだ。じゃあ、晩ご飯を食べてすぐ
にお風呂に入って、そしてすぐに寝よう。課題は……仕方が
ない。どうせ起きていても今日は手に付かないだろうし。

きつと寝たらいい考えが思いつく。何も根拠はないのは分
かっていたが、そうでもしないと押し潰されそうだった

明日は零に相談してみようか。さっき、気のせいだと言わ
れたと言ったが、別に頭ごなしに否定されたわけじゃない。
ただ、根拠がないと言われただけなのだ。それも心にグサツ
と刺さったのだがまあいいでしょう、私が全面的に悪い。彼
に非はない。いや、質問攻めにするのはどうかと思うが。

って、そういうことを考えている場合じゃないよ問題は：
：あー、もういいや。明日だ明日。明日からちゃんと考えま
す。フラグじゃないからね！ 晩ご飯食べなくていいや。お
風呂入ってさっさと寝よう。私みたいな馬鹿がどれだけ考え
ても多分答えは出ない！

全ては明日。楽天的に見えて実はネガティブな思考の元、
彼女の一日は終わっていった。